大厄記

久保綱

朝日新聞社

大厄記

久保綱

朝日新聞社

NETテレビ開局十五周年
記念懸賞小説優秀作

大厄記

定価　六八〇円

発行　昭和五十年十一月十五日

著者　久保綱
装幀　熊谷博人
発行者　角田秀雄
印刷所　図書印刷株式会社

発行所　朗日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋
© Tsuna Kubo 1975

0093—254335—0042

序に代えて

この作は久保綱の遺作でございます。亡夫は戦後一切の筆を断っておりましたが、「大厄記」は、これが自分の最後のものだと申しまして、持病の胃潰瘍をおして数ヵ月で書き上げました。医師や家人のすすめもきき入れず、はげしい胃痛をこらえながら執筆致しました。

構想は前からずっとあったもののようで、自信もあったもののようでございます。筆を擱くと同時に、堪えきれぬように病院に入院して手術を受けました。潰瘍は意外に大きかったそうでございますが、手術の結果は良好だとの事で、一同ほっと致しましたけれども、執筆中の無理がかさなったのと、折柄の七月の炎暑のために体力の衰弱がひどく、ついに不帰の客になりました。昭和三十六年七月二十二日、六十二歳でございました。

以来十数年、何とか陽の目をみさせたいといつも心にかかりながら、よい機会もなくそのままになっておりました。地下の夫もさぞ喜びますことでございましょう。

妻　義子

目次

東北の竜　7
生別死別　32
逃避行　58
紅勘横丁　75
余燼　95
執念　101
恐怖の街　108
風雲　133
大坂蔵屋敷　156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大厄記 173
巡転業 195
愚と賢 231
越後の冬 244
進発 254
東北皆敵 265
深夜の音 289
濁流 297
手賤 309
時の敗者 322

大厄記

東北の竜

一

広い操練場の堤に沿うて青い葉をしげらせた栴檀の並木が東から西へまっすぐに延びている。さわやかな朝の微風がその梢にささやきかけると、葉と葉をこすり合い小枝をふるわせて、樹々はそれにこたえた。ところどころなだらかな丘の起伏のある広々とした操練場は、土の色も見えぬくらいに若草が一面に生いしげり、青々と地肌を覆うていた。梢をおとずれた微風は、すぐに青い草原にかけおり、葉末をそよがせつつ過ぎて行った。

栴檀の並木の向うには深い蒼い堀と頑丈にたたみ上げられた石垣、そしてさらにその上に欝蒼と横に引いた老松の裳裾を前景に長岡城の天守閣が、牧野家の祖駿河守忠成が、元和四年この地に封ぜられて以来、二百五十余年の長岡城の威武と伝統をほこるかのように、朝空に巍然としてそびえていた。

「右に向きを変え、進めーっ」

一つの丘の向うに高い号令が起った。その号令とともに、たらら、たららと太鼓が鳴り出した。二列横隊にならんだ長岡銃士隊の兵が、剣付銃をかつぎ、露草をふみしだきながら進んで来た。

「早がけーっ」

太鼓の音が、急に速くなった。兵は号令とともに鼓手の打ちならす速歩調の太鼓の音に歩調を合せ、銃剣をきらきらと陽にきらめかせつつ走って来た。その隊のほかにも、幾組もの兵が操練場のあちこちに黒く屯集したり、号令とともに進んだり駆けたりしているのが見えた。

「散れーっ」

「伏せーっ！　寝射ちの構えーっ」

高いさけびとともにそれらの兵は、列を乱して駆けだしたり、折り敷いて伏射の姿勢をとったり、また飛び起きて進んだりしていた。銃士隊の兵は、削袖羽織に裁着袴をはき、銃身の短い新式銃をかつぎ、そろいの軍装をしていたが、士分以下の者で編成された銃卒隊は、筒袖に脚絆わらじがけの野駆け姿や、木綿の黒袴をつけ、白鉢巻をしたのや、まちまちの服装で、かついでいる銃も、旧式の先込銃や、中には火縄銃や銃に似せた長い樫の棒をかついでいる者もあった。

「とまれっ！　隊伍を解いて任意の姿勢をとって休んでよい」

堤近くまで進んで来た一隊が、隊長がこう号令すると、兵はすぐに隊伍を解き、草の上へ銃を投げ出したり樹の幹にもたせかけたりして、堤の上へ、草の上へ腰をおろした。

「今泉、こっちへこないか」

兵の群れのはずれに立っていた若い鼓手に声をかけると、隊長は陣羽織の裾をあげて栴檀の根元へ腰をおろした。草はまだつめたかった。投げだした隊長のわらじも、細袴の裾も朝露を吸ってぬれていた。鼓手はすぐそこまで近づいて来ると、革帯で腰にくくりつけていた洋式太鼓をはずしながら、

「新式の大砲が江戸から到着したそうですが、隊長、ごらんになりましたか」と、聞いた。

「うむ、見た。砲術教官の上遠が、わが藩の武備に新たに強力な精鋭を加えたものだといって鼻高々だ」

「アーム、なんとか……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「アームストロング速射砲……、日本にもまだわずか三門しかないそうだが、今日、その披露があるはずだ」

「実弾射撃もなされるのでしょうか」

「いや、今日は砲の披露だけだろう。その、たった三門のうちの二門までが我が藩の手にはいったというのは、はるばる横浜まで出向いて行った上遠教官らの努力もさることながら、兵制改革以来、北陸随一の武備充実をめざして強硬な因循派の反対をおさえ、武器購入にふみ切った河井執政の英断があったればこそだ」

「早く拝見したいものですね」

鼓手の眼には、若々しい感激が燃えていた。顔はまだ汗ばんでいて、血の色がその頬に美しく冴えていた。

城内三の丸御門につづく高い石垣のはずれから、操練場は東西に広くひろがっていた。操練場の一隅には、隠退した前藩主忠恭の館跡をそのまま充てた兵学所の建物があり、そこからややはなれたところに、高橋小路から移した武器倉や弾薬庫などが、幾棟もならんでいた。

「あ、出て来ました」

鼓手がさけんだ。三の丸門のあたりから高い人声がして、そこから黒い兵の姿があふれ出、三門の大砲が石垣の下の広場を引き出されて来るのが見えた。そのあとから、兵学教官や砲術教官や軽装の兵が、操練場へ黒々とあふれ出て来た。広場の中ほどあたりまで進んで来ると、先頭に立って誇らしげに指揮をとっていた若い教官の上遠多司馬が、

「ようし、この辺！」

と叫んで、立ちどまった。三門の大砲は、草の上に一列に砲口を斜めに空へ向けて放列を布いた。右の端に木製の砲架にずんぐりと胴のふとい砲身の短い図体を横たえているのは、七、八年前幕府から払

い下げを受けた旧式な青銅製八十斤弾の臼砲で、これでもついこの間までは、長岡藩の武備の中でも精強を誇る唯一の巨砲だったのだ。他の二門はいま話題にのぼっていた新式のアームストロング速射砲で、横浜の武器商人エドワルド・スネールの手から購入したもので、同時に購入した数百丁の新式銃とともにスネールの所有船オースチン号に積込まれて新潟へ回送され、そこから陸路を一昨日ここへ運ばれたばかりのものであった。

新着のアームストロング砲は、鉄の車輪のついた砲架の上に黒光りのする剽悍な砲身を横たえ、しずかに空をにらんでいた。人々は新式砲の周囲を取巻いて、こまかい目盛のある照準器や、精巧な発火装置や、旋回軸によって砲身がたやすく動く仕掛けを見て口々に感嘆の声を放った。

「まず、おおよその狙いをつけて第一弾を放つ。その初弾の落下地点を見定めて照準を改め、第二弾を撃ち出す。……次第にその精度を高め、命中の度合を的確にする。……しかし、なかなか微妙なもので、いかに速く飛ぶ弾丸でも、強風や大気の流れにさからって遠くへ飛ぶうちには、得て狂いを生じやすいのであるが……」上遠は旋回軸を回して、砲身を上下へ動かして見せながら、

「その狙いの狂わぬように……、砲口から中をのぞいて見られるがよい。筒の中にゆるやかな旋条が流れているが、これは砲弾を撃ち出すと同時に、弾丸が非常な速さで空中を旋回しながら飛ぶためのからくりで、そのために弾丸は空中をきりきり舞いをしながら一直線に飛んで目標に命中するというわけだ」

「ふうむ、いかにも精巧なものだな」

兵学教官の森広之丞が、こううなずくと、筒の中をのぞこうと一足前へ寄った。

人々の一番前に、かたばみの五つ紋の羽織に馬乗袴をはき、節のつまった竹の笞を両手で曲げたりのばしたりしながら、上遠の得意げな説明を聞いているのは、長岡藩の執政河井継之助であった。額がひろく、少し下がり眉の下に眼窩が深くくぼんでいて、黙々と微笑をふくんで耳を傾けてはいたが、時々

じろっと人々に向けられる眼には、なんとなく他人を威圧するようなするどさがあった。

「ヨーロッパの国々は三百年この方の戦乱で、兵器も非常に進んでいるそうであるが、この精巧な速射砲の構造を見ても、いかにもとうなずけます。わが国列藩の中でも、最も強藩と目されていた薩州でさえ、鹿児島湾へイギリスの艦隊に攻め込まれて、わずか二日間の砲撃で砲台はことごとく打ちこわされてしまうし、あまつさえ城下を大半焼かれてしまった。中国随一の武備をほこっていた長州でも、英、米、蘭、仏の連合艦隊の猛砲撃をくらい、結局は旗を巻いて城下の誓いをなさざるを得なかった。これをもってしても、欧州の火器がいかにすぐれているか、精巧であるかがわかろうというものです」上遠はやや興奮したらしい高い声で一気にここまでいうと、人々の顔を見回して、

「一弾よく城壁を打ち砕き、一発よく数十名をたおす……、その強力な威力をもつ火器が、欧州にすらまだ数少ないと聞き及ぶが、ましてや、わが国にはまだ三門しかないという新式速射砲が二門までも、……しかも天下の風雲まさに急ならんとする時、首尾よく当藩の手中に帰したという事実は、その意義まことに大なりと拙者は考えます。一発射ったら筒の中を掃除して、砲身の冷えるのを待ってから、おもむろに第二弾を発射するというような、これまでの旧式砲や、弾着距離わずか七、八丁そこそこというようなこれなる怪物然たる旧式の臼砲などにくらべて、いかにこの二門の速射砲が我が藩の兵備に新たな威力を加えたか、加うるに数百丁の新式ゲーベル銃あり、この武備あれば、北陸諸藩はおろか、全国の雄藩をも畏怖せしめるに十分であるというべきです」

「上遠の論、大いによい」河井継之助が微笑を含んでこういうと、右のてのひらを笞の先で軽くたたきながら、

「だが新鋭の兵器をそなえ、欧州の兵術をまなぶことだけで、日本中に敵するものなしと自負するのは軽々しくはないかな。当今、公儀をはじめ諸藩競って欧州の兵術をとり入れ、外国に倣うて新式の調練に熱を上げてはおるが、それで能事足れりとしては、必ずかえって無制の兵に後れを取るのみだ」

「仏つくって魂入れずではな」
人々の群れの中から、そんなしゃがれ声が聞えた。
「その通り！　五穀の美なるも熟せざれば糞稗にしかずというのはここのことだ。肝心なことは、西洋の兵術兵器をとりいれ、その運用に精進練達し、用兵操法の妙をきわめた上で、綽々然として余裕ある境地に達することだ」
「仰せまでもなく、そのことはよく銘に銘じております」
上遠が、うなずいていった。河井は微笑の眼を、上遠から左右の人々へ移した。
「要は、兵器よりも技、技よりも胆……、究極は、この一語に尽きる。応用緩急の妙、不意の変に応ずる奇略がなくては、いかに新鋭の兵器を擁すればとて、いざ実戦という段になって、物の役に立たぬことになろう。あの歩兵調練でもそうであるが……」と、河井は答を上げて向うを指しながら、
「進退の動作がいかに巧みであっても、それに横溢する精神がなくては、木偶も同然だ。木偶人形を何百ならべてみたところで、戦には勝てまい。形よりも精神が第一、歩兵と散兵と砲隊と、この三兵連合の千変万化こそが、実戦にあたって真にものをいうのだ。そのこころで、皆、励んでもらいたい」
「その覚悟でいたします」
上遠がそういうのへ軽くうなずき返して、草を踏んでゆっくりと歩き出したが、その時前面を調練の一隊が駆け足で通りかかるのを見ると、河井はふと足をとめた。駆けて行く隊列の横を、一人の少年鼓手が軽快な速歩調の音をひびかせ、細く引きしまった脚を草におどらせつつ駆けて行くのが見えた。
「ほう、勇ましいな。だれだ、あれは？」
「銃士隊の穂刈鋭之助です」
「いや、あの鼓手は？」
「ああ、あれは今泉弥平太、……郡方書役今泉弥平太のせがれ、庄衛という少年です」

「すると、崇徳館の助教、今泉弥彦の舎弟か」
「そうです。なかなか負けん気の少年で、あのように隊士と伍して立派にやってのけております」
「ふむ。やりおるのう」
駆け抜けて行く隊列を、河井は微笑をふくみながら見送っていた。隊列は太鼓のひびきとともに、操練場の向うへ遠くなって行った。

二

長岡藩は早くから兵制改革に熱心であったが、その先頭に立って藩論を指導し積極的に推し進めたのは、河井継之助であった。まだ郡奉行の職にあるころから兵制の改革をとなえ、私財をなげうって家中の有為の子弟を諸国に送って洋式兵術を学ばせ、その準備に着手した。ある者は江戸に出て下曽根甲斐守や江川太郎左衛門の門に入り、洋式の兵術を習得して来た。ある者は遠く長崎に派遣されて欧州の兵式調練を学び、または蘭学を修めて帰った。河井自身もまだ若いころ自費で江戸へ出、佐久間象山について砲術をまなんでいる。河井が象山の塾にあったのはわずか半年に満たぬ短い期間だったが、その短時間にことごとく砲術を鍛練自得して、十匁筒で五十間の的に百発百中の技量に達し、象山はもはや教えるところなく、「その技、如神」と嘆賞したといわれている。
前藩主牧野備前守忠恭が老中職を辞して帰国する時、河井は藩主をうごかして江戸藩邸にあった重宝什器をことごとく売りはらい、その代金で横浜の武器商人エドワルド・スネールから新式の兵器を購入して帰った。この思い切った措置には、藩の武断派の中にさえ強い非難の声を放つ者があったが、その前年、幕府が再度の長州征伐に失敗して幕府の権威をいっそう失墜するのと反対に、急激に高まって来た反幕府の風潮はますます王政復古の機運に拍車をかけ、薩長連合の気配が濃くなって来るなど、いわ

ゆる維新の混乱期にあって各藩とも必死に武備充実に狂奔していた時だったから、長岡藩のとったこのような非常措置も、あえて異とするに足りなかった。一説には、薩摩藩がすでに購入の契約を進めながら、その代金の調達に手間取っている間に、エドワルド・スネールと旧知の間柄である河井が横から割り込んで、奇略をもちいて強引に買い取ったもので、執拗に幕府の転覆をくわだてる薩長の陰謀に対して、長岡藩が一矢をむくいたのだともいわれているが、攘夷派だろうと佐幕方であろうと、利益の多い方へ売ろうというのがそのころの外国武器商人のやり方だったから、そういう武器争奪の裏面史が伏在しなかったとはいわれまい。

長岡藩は表高七万四千石であったが、実収は二十万石以上であった。だが、財務当局に人を得ず、数十年にわたって窮乏をつづけ、藩政は窮迫の度を加えるばかりだったので、領内の町民からいろいろな名目でもって献金させたり賦課金を加えるなどして、からくも財政を補っているという状態がかなり長くつづいた。忠恭の信任を得、次第に登用されて郡奉行兼番頭格町奉行の職についた河井継之助は、腹心の村松忠次衛門の忠実な協力を得て藩政の改革に乗り出した。それまで荒れるにまかせてあった信濃川沿岸の水腐地を埋立てて新田を拓き、小役人まかせで乱脈にながれていた毛見制を改め、四公六民の年貢法を厳正ならしめるという農民対策からまず彼の改革は始まった。

賄賂や賭博を禁止し、奢侈の風を矯正した。「婦人の髪飾り、べっこうは勿論、まがいものも用い申すまじき事」とか、「笄のほか簪一本にかぎるべき事」とかいうようなきびしい奢侈禁止令を出したため、富裕な階級の婦女子からはひそかに怨嗟の声をはなたれはしたが、藩の財政はだんだん立ち直って来た。どこの藩でもそうであるが、「世襲」という不文律が、おかすべからざる法律のように存在していた。阿呆でも三太郎でも家老の家柄に生れると、その伜は家老になれるし、軽輩はいかに器量すぐれていても、五十石は五十石であった。河井の家は代々百二十石の禄高で、七万四千石の藩としては中流以下の家柄であり、その器量によっては郡奉行くらいまでの職には就き得ても、それ以上の役に上る

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com